

つどいの活動のなかで、表参道交差点・旧安田銀行前(現みずほ銀行前)、旧原宿一丁目・熊野神社に隣接する新道などでは、推定数100人単位の死者が出たことが証言などによって明らかになりましたが、こうした事実は、死者数のみを抽出した公文書には残っていません。

証言と資料を突き合わせ、この夜何が起

きたのか、なぜ、それほど多くのひとが、その場所で亡くなったのか。基礎的な事実を明らかにすることから、課題が残っています。

つどいのエネルギーは、まだ当分の間、持続するものと思われま

す。(やまもと・ただひと／青山学院女子短期大学、写真提供…筆者)

空襲の記憶から平和をつくる 熊谷空襲と市民運動

加藤 一夫

2015年10月末、私は、25年近く住んだ海辺の街、静岡県焼津市から妻の実家がある「海なし県」埼玉県熊谷市に移転した。それからすでに4年が過ぎた。

熊谷市は、その昔、源平合戦で活躍した熊谷直実ゆかりの地であり、江戸時代は中山道の宿場町で、首都圏の関東北部に位置している人口約20万人の町である。江戸時代から続く「うちわ祭り」(毎年7月)は今も続いている。日本一暑い町としても知られている(2018年7月には41.1度Cを記録)。今年(2019年)はラグビーW杯の主催地の一つで、市は「ラグビータウン」として売り出している。

実は熊谷市は1945年8月14日深夜と15日未明(午前2時頃まで)に米軍の空襲を受けた「最後の空襲」都市(秋田、小田原、伊勢崎など)の一つである。房総半島の南方から侵入してきた89機のB29が高度3000〜5000メートル上空から照明弾と共に多くの焼夷弾を投下した。この空襲で死者266人と負傷者約3000人を出し、市街地面積の74%、全戸数9020戸の40%に当たる3630戸が罹災し、全人口(当時約55000人)の28%に当たる15390人が罹災者となり、多くの公的建物、学校、文化財施設、寺院などが焼失した。「玉音放送」から12時程前の出来事

である。

なぜポツダム宣言受諾直後の8月14日夜と15日未明に空襲されたのか。様々な見解がある(中島飛行機の部品製造都市だったなどが、米軍は、場当たりの作戦でなく来るべき本土上陸決戦の一環として明確な軍事作戦にしたがって空襲を実行したことは、すでに公開されている米軍資料で明らかになっている)。

この空襲については、節目の年ごとに市や公的機関が報告書を出版しているし、様々な運動体や地域の研究会、郷土史家たちも記録を出している、その全体像もほぼ分かっている。当時の市民の体験談も多く綴られていて、その被災の全容や悲惨な状況が浮かび上がっている。妻の実家もこの空襲で全焼したという。

ただ、これらの報告や発言には、当時、日本が戦争をしていて、それに市民も全面協力していたという当事者意識はあまり感じられない。時がたつにつれて諦観が強まり、この出来事はあたかも地震や津波、洪水災害の罹災者と同じ次元で語られることが多い。

熊谷だけではない。日本のどこの地域でも、空襲体験を忘れないとして多くの運動が行われ記録も出版されている。しかし、その結果は、成功したとは言えない。この

証拠が憲法9条を変えて戦争できる国にしようとしている「安倍政治」(国民の半分近くが支持しているらしい)が作り出している政治社会状況である。もし、平和運動や地域活動が少しでも勝利していたら、このような事態にはならなかったはずである。

2017年秋、妻の長期入院から解放された後、私は市内で活動している市民団体の一つ「熊谷空襲を忘れない市民の会」から入会を勧められた。この会のHPやパンフレットにはついでこう述べられている。

「熊谷空襲を忘れず、平和な社会を実現したいと考える熊谷市民を中心としたゆるやかな集まりです。党派や所属団体などの相違や有無を超えて同じ思いを持つ人がつながり、対話し、協力し合って平和な社会を実現していきたいと考えます。そのため人と人が出会えるきっかけを作り、活動する場になりたいと考えます」

会を立ち上げた共同代表の一人、米田主美氏(元教員で詩人)によれば、2015年に安保関連法案をめぐる反対運動が高まっていた時、彼女は3人の母親と共に、また日本が「戦争ができる国」になるのではと恐れ、特定の党派や所属団体を超えて平和について語りあい行動する会をつくったという。(ちなみに、米田氏は1945年8月14日空襲の日に生まれている)。当初の名前は「熊

谷空襲を忘れない・平和を考える会」であった。

その後、賛同者は増えて(現在100人を超えている)、各メンバーは独自に、平和について様々な活動を行っている。定期的な駅前スタンディング、講演会、映画会、集会、イベントなどを計画・実行している。空襲を忘れず記録するのが目的ではない。こうした状況を生み出さない平和のために行動する会なのである。

この会には、熊谷在住の俳人金子兜太氏も賛同人になった。金子氏(2018年2月死去)は、あの「アベ政治を許さない」を揮毫した人である。金子氏は会に応援の書簡も寄せてくれた。また、この町出身の作家森村誠一氏も賛同者となった。

私自身、この会への賛同者となるに際して多くの市民の議論の場を作ろうと、以前、静岡・焼津市で移転直前まで続いていた「市民平和講座」を熊谷でも立ち上げ、2018年2月から月1回で開催している。私自身この空襲を単に地域の出来事ではなく、より広い観点で戦後史に位置付けてみたいと考えている、そのために各地で同じような活動を行っている東京(下町、山の手、八王子)、横浜、神戸、岡山などのグループと連絡をとりつつある、毎年3月の東京大空襲の集会にはすでに5年前か

ら参加してきた。今年は、個人ではなく会のメンバーと共に参加し関係者と接触を始めていく。

私に加わった後の会のイベント・集会は、2018

年3月に元NHKジャーナリスト永田浩三氏の講演会、2018年8月に熊谷空襲体験者の話、2019年3月にはビキニ事件65年と福島原発被災8年をめぐるシンポジウム、そして今年8月25日には「熊谷空襲と東京大空襲」と題して毎日新聞記者で戦後賠償裁判などを精力的に取材・発表しているジャーナリスト栗原敏雄氏の講演会を予定している。

なお来年の戦後75年に向けて、会の活動記録の刊行を準備するプロジェクトが動き出している。これによって単に地域の出来事としてだけでなく、世界と日本の歴史に位置付けて、その意味を広い観点でとらえ直したいと考えている。

(かとう・かずお/熊谷空襲を忘れない市民の会)



熊谷駅前、毎週金曜日のスタンディング(熊谷空襲を忘れない市民の会ブログ)